

受信・発信できる英語能力の伸長をめざして

——「英語新聞作り」の成果——

英語科 津 田 ひろみ

目 次

I はじめに.....	106
II 英語分割授業におけるレギュラーコースの概要.....	106
1 英語3分割授業のアウトラインと現状	
2 レギュラーコースの位置付け	
3 レギュラーコースの意義と問題点	
III レギュラーコースにおける指導の実際と教材の工夫.....	107
1 レギュラーコースのねらい	
2 音声によるインプットとそれに続くアウトプット	
3 文字によるインプットとそれに続くアウトプット	
4 総まとめとしての「英語新聞作り」	
IV まとめ.....	121
V 今後の課題.....	122

要 旨

本稿は英語科3年分割授業のひとつ、レギュラーコースにおけるここ数年の実践に関する報告である。

本コースのねらいは学習指導要領にも書かれている「実践的コミュニケーション能力の伸長」である。歌や英字新聞などを教材として取り上げ、「生きた」英語をインプットすることにより、英語圏の文化や習慣に触れる機会を提供してきた。同時にコース内での生徒の発表を通じて、お互いの考えを「伝え合う」という姿勢を育ててきた。一年間の授業のまとめとして「英語新聞作り」に取り組ませたが、苦勞しながらも自分の考えを英語で表現し新聞の形に完成させたとき、生徒は満足感を味わい、英語に積極的に取り組む姿勢をみせた。

英語学習に対する生徒の心理的側面に焦点を当てて工夫をしてきた結果、英語によるコミュニケーションに対する生徒の動機付けという点において、レギュラーコースは大きな成果を上げたと確信している。

今後は、英語母語話者との話し合いの機会を設定するなど、いくつかの課題を検討していきたい。

I はじめに

平成10年中学校学習指導要領、第9節外国語の項では、中学校英語学習の目標を『実践的コミュニケーション能力を養う』と定めている。では、中学3年生にとって「実践的コミュニケーション能力」とは何だろうか。本稿ではそれを単なる音声中心のパターン練習でなく「英語を介して意思伝達を図り相互に理解し合うこと」と捉え、さらに、その土台として国際理解が必要であるとの考えに立脚して授業を考察する。

教師はできるだけ多くの生きた情報を提供することによって、生徒が日本人として英語圏の文化・生活を理解すると共に、それに対して自分の考えを持ち、発信できるように指導することが必用だろう。その過程を本コースでは、できるだけ英語を介して行ってきた。生徒に情報を提供するにあたっては、たとえ中学生の英語力のレベルより少し高めであっても彼らの知的発達レベルに見合ったものを選択し、彼らの興味・関心を引き出すことを優先した。3年英語科レギュラーコースでは、学習指導要領にある「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと」の総まとめとして英語新聞作りに取り組み、そこまでの準備段階で、聞く・読む・書く・発表する、それぞれの角度から生徒自身が英語によって意思伝達する力を伸ばせるような指導方法を工夫してきた。

このような形でここ数年、3年生のレギュラーコースの授業に取り組んできたが、本稿ではその成果をまとめ、それと共に今後の課題を検討したい。

II 英語分割授業におけるレギュラーコースの概要

1 英語3分割授業のアウトラインと現状

第3学年は34人が1クラス、35人が3クラスの計139人（内男子47人、女子92人）から成る。その中に帰国生12人が含まれている。週4時間の英語授業のうち1時間だけ各クラスを3つのコース（基礎コース、レギュラーコース、プラクティカルコース）に分けて授業を行っている。この時間は「分割授業」と呼ばれ専任の教師1人と非常勤講師2人（うち1人は外人講師）によってそれぞれ受け持たれており、年間およそ25時間ほどの時数である。

この「分割授業」は生徒の力の伸長を図るためのものであり、成績によって強制的にグループ分けするものではない。コース分けは生徒の自主性に任せており、明らかに選択が間違っていると思われる場合や人数配分があまりにも偏った場合にのみ、教師から生徒にアドバイスするが、できるだけ生徒の自主性を尊重するようにしてきた。

コースの人数配分について教師側では、プラクティカルコースは7人、レギュラーコースは18人と当初大枠を設けたが、強要はしていない。年度によりやや偏りも見られるが、それぞれ会話や添削に可能な限り生徒を受け入れるようにしている。今年度は各クラスとも基礎コース

15人、レギュラーコース12人、プラクティカルコース8人程度に落ち着いた。

2 レギュラーコースの位置付け

生徒がコースを選択する際の各コースの基準と特色を挙げよう。

- (1) 基礎コース：英語の文法を初歩から復習する。文法問題を解くことが中心。
- (2) レギュラーコース：3年生の標準的な英語力を持った生徒のためのコース。普段の英語の授業でできない歌や長文などに取り組む。「英語新聞作り」が特徴。
- (3) プラクティカルコース：外人講師が全ての授業を英語で行う。物語、新聞などを使って、意見交換、会話、ゲームなどを楽しむ。帰国生中心のコース。

コース分けは1学期と2学期の初めに2週間の試し期間を設け、英語力の伸び具合や本人の希望によりコースを変更することもできる。常時コース変更を許可しては学習の効果が期待できないが、生徒の学習意欲を高めるために、生徒と話し合いながらある程度フレキシブルに対応している。

3 レギュラーコースの意義と問題点

基本的には生徒が自分の英語能力によって自主的に判断してコースを選択するが、その選択には人間関係も影響していると思われる。その結果、コース内には初めからある程度信頼関係が成立しており、意見を述べたり相互評価するなどコミュニケーションを図る上で非常に良い環境であるといえる。規模の点から見ても、分割授業では生徒全員が発表に関わるのが容易であるし、教師が個々に添削することも可能で語学学習に理想的である。

だが、問題点もある。まず他の2つのコースに比べ生徒の授業に対する目的意識が低い。自分の英語力のどこを補いたい、あるいは更に伸ばしたい、といった積極的な目標を持たない生徒が多い。コース内の生徒の学力差がもっとも大きいのもこのコースの特徴である。

III レギュラーコースにおける指導の実際と教材の工夫

1 レギュラーコースのねらい

このコースは教科書の単元を教えるものではなく、受験指導をするものでもない。中学3年生相当の英語の学力を持つ生徒に、今まで学習してきた英語を総合的に復習させながら英語表現力を伸ばし、グローバルな視点を持たせようとするものである。具体的には、各自の英語力をフルに活用して受け取れる程度の情報を教師から提供し、それについて生徒に考えさせ互いの意見を発表させている。この活動を通して、英語圏の人びとの生活や考え方、ものの見方に関心を持たせることがねらいである。その結果、英語に対する生徒の学習意欲の高揚にまでつなげたいと考えている。そこで、どのような情報を提供し、どうやって生徒の意見を引き出す

か、という2点に焦点を当てて工夫を試みた。

生徒には「何かインプット（受信）したら必ず自分で考えてアウトプット（発信）しよう」という基本姿勢を常に教えてきたが、教師の役割は生徒が自然にアウトプットしたくなるようなインプットをしてやることである。その際には、そこに介在する日本語を徐々に減らしていくよう勇気付け、アドバイスすることも必要である。では、実際の授業で何をどうインプットし、どのようにアウトプットを引き出したか、ということについて「音によるインプットとそれに続くアウトプット」「文字によるインプットとそれに続くアウトプット」「総まとめとしての英語新聞作り」という3つの流れに分けて、生徒の反応を交えて報告したい。

2 音声によるインプットとそれに続くアウトプット

(1) 歌のCD

授業の導入として英語の歌のCDを積極的に利用している。歌は、生徒の頭を英語モードに切り替え、興味をひくのに最適である。過去に取り上げたアーティストと曲を次に列挙したい。

Carpenters: Close to you, Yesterday Once More, Top of the World, Sing

John Lennon: Yesterday, Imagine, Let It Be, Stand by Me, Happy Christmas

Simon & Garfunkel: Bridge Over Troubled Water, The Boxer, El Condor Pasa

Peter, Paul & Mary: Puff, 500 Miles, Lemon Tree, Cruel War

Julie Andrews: Do-Re-Me, Sound of Music, My Favorite Things

Mariah Carey: Hero

Elton John: Candle in the Wind

'NSYNC: Bye, bye, bye

Lena Maria: Amazing Grace

その他に、ディズニー映画“Aladdin”より“The Whole New World”やミュージカル“Footloose”より愛のテーマ“Almost Paradise”なども取り上げてきた。特にCarpentersやJulie Andrewsの歌は、発音がはっきりしていて文法的にもきちんとしており、歌詞の中にスラングや卑猥な言葉も見られず、メロディーも親しみやすく、教材として優れていると思われる。BeatlesやPPMも変わらぬ人気があるが、'NSYNCやBack Street Boysのような現在活躍中のグループの曲は、当然生徒の興味を引いた。

英語の歌をどう授業に採り入れるかについては、リスニング教材として聞かせ、歌詞の穴埋めをさせるのが最も一般的だが、聞き取りの後もう一度CDをかけて、音楽を楽しみながら英語の音のリズムを体で感じさせるようにしている。生徒の感想にも「歌を通じてリスニングやfeelingを得られた」と書かれていたが、この“feeling”は、教科書中心の普段の授業ではなかなか得ることのできない、レギュラーコースで掴み取ってほしい英語力のひとつである。

(2) インプットの工夫

英語の歌が、リスニングの教材だけに終らず、生徒の関心を世界に向けるきっかけとなるように、いくつかの工夫を試みた。例えば、Elton John の“Candle In the Wind”を聞かせた時には、ウェストミンスター寺院で行われたダイアナ妃の葬儀の模様をビデオで紹介した。John Lennon の“Imagine”を授業で取り上げた時には、ちょうどその日の朝、ヨーコ・オノがその歌詞の一節を掲載したニューヨーク・タイムズの1ページをインターネットで取りだして、歌といっしょに提示した(資料1)。歌を聞いた後この記事をもとに9・11事件やジョン・レノンの生き方について話し合った。その後しばらくの間ジョン・レノンの似顔絵やイマジン歌詞のプリントのあちこちに書きこまれていた。生徒の心に訴えるものがあつたのだろう。

(3) アウトプットの工夫

映画“Sound of Music”の“My Favorite Things”を穴埋めしながら聞かせた後、自分の気に入ったフレーズを書きぬかせた。それを参考にして、自分の『お気に入り』を一行にまとめさせ、全員に発表させた。生徒の作ったフレーズには非常に視覚的な表現が多く、そのまま俳句にできそうな作品も見られた。次にいくつか例を挙げたい。

〈資料1〉 NY タイムズと「イマジン」

NYタイムズ「イマジン」全面広告

元ビートルズの故ジョン・レノン(享年40歳)の妻でミュージシャンのオノ・ヨーコ(68)がジョンの代表曲「イマジン」の1節だけを記した全面広告を25日付の米ニューヨーク・タイムズに掲載した。愛国心、連帯を打ち出すメッセージが多い中での平和を強調した広告は報復に傾いている米国民に一石を投じることになりそうだ。

歌詞の一節8語だけ



オノ・ヨーコが掲載したNYタイムズの全面広告(共同)

「Imagine all the people living life in peace(人々が平和に暮らすことを想像しよう)」。真っ白なページの中央に記された、あまりにも有名な「イマジン」の一節。だが、その8語は報復だけが解決の方法ではないというヨーコの気持ちを表していた。

ページ内にはヨーコの名前はもちろん、写真もいっさいなし。広報担当者は「広告に名前を出さない方が、より効果的と感じたから」と匿名の理由を説明。「何よりも(ヨーコが)伝えたいメッセージは、すべてこの広告の中にある」としている。

さらに、ヨーコはニューヨークの繁華街・タイムズスクエアにもジョンの曲「ギブ・ピース・ア・チャンス」を引用した巨大な屋外広告を出すことを検討している。ジョンが望んでいた戦争のない、平和な世界を目指して行動中だ。

ヨーコの呼びかけに、周囲も協力を惜しまない。20日にニューヨークのラジオ・シティ・ミュージック・ホールで予定されていたが、テロ事件のために10月2日に延期されたジョンのトリビュート・コンサートにはニューヨーク市救済組織の活動への寄付も加えられた。

ヨーコはジョンの誕生日である10月9日に、さいたまスーパーアリーナでMr.Childrenの桜井和寿(31)やゆずらトップアーティストが勢ぞろいして行われるライブイベント「Dream Powerジョン・レノンスーパーライブ」にも参加するが、ここでも、テロ事件に関する平和へのメッセージが語られると思われる。

◆オノ・ヨーコ 1933年2月18日、東京都生まれ。68歳。学習院大在学中に渡米。28歳から前衛芸術家として活動始める。2度の離婚を経て、69年にジョン・レノンと結婚。同年にビートルズを脱

退した夫と平和活動と音楽活動を開始。75年、長男・ショーンを出産。80年にジョンが40歳で死去してからも音楽活動を続け、ショーンとのアルバム「ライジング」などを発表した。

IMAGINE by John Lennon

Imagine there's no heaven	想像してごらん天国なんてないんだと
It's easy if you _____ 1	その気になれば簡単なことさ
No hell below us	私たちの足下に地獄はなく
Above us only _____ 2	頭上にはただ空があるだけ
Imagine all the people	想像してごらん 全ての人々が
Living for _____ 3	今日のために生きていると
Imagine there's no _____ 4	想像してごらん 国境なんてないんだと
It isn't hard to do	そんなに難しいことじゃない
Nothing to kill or die for	殺したり死んだりする理由もなく
And no religion too	宗教さえもない
Imagine all the people	想像してごらん 全ての人々が
Living life in _____ 5	平和な暮らしを送っていると
Imagine no possessions	想像してごらん所有するものが何もないと
I wonder if you _____ 6	はたして君にできるかな
No need for greed or hunger	欲張りや飢えの必要もなく
A brotherhood of _____ 7	人はみな兄弟なのさ
Imagine all the people	想像してごらん 全ての人々が
Sharing all the world...	世界を分かち合っていると
You may say I'm a dreamer	僕を空想家だと思うかもしれない
But I'm not the only _____ 8	だけど 僕ひとりじゃないはずさ
I hope someday you'll join us	いつの日か きみも僕らに加われば
And the world will be as _____ 9	この世界はひとつに結ばれるんだ

Name _____

A bird flies against the red and big setting sun.

The sea shining with the golden sun

Eating Kakigori in winter

The cat sleeping on the bed

A green lemon tree on the table

My red sweater and warm mattress

生徒は関心を持ってお互いの発表を聞き合ったため、発表する生徒は、一行という短さも手伝ってか、恥ずかしがらずにクラスの前で発表することができた。

(4) 映画のビデオの利用

今年度は3学期の授業2～3時間を使って映画“E.T.”のビデオを見せた。第1段階では、登場人物を把握させてから聞き取れた台詞を書き取らせ、第2段階では、あらかじめ書きぬいておいた台詞を聞き取り、その時のシチュエーション（誰が、誰に、どんな場面で語ったか）を記述させ、第3段階ではキーとなる台詞の一部を穴埋めさせた。各段階において、その日に見た部分のあらすじと感想を英語で書かせたが、無理だと思う生徒には日本語でも良しとした。結果は予想した以上に良く聞き取れており、字幕がないほうが英語に集中できるという意見もあった。『大切な命』『心のつながり』『限りない可能性』『分かり合えること』など、テーマに迫るキーワードが感想の中にいくつも見られた。生徒の心に響くインプットを与えれば自ずからアウトプットは得られることを実感した(資料2)。映画は生徒に人気の高い教材であるだけでなく、英語の幅広い学習に効果的な教材であることを確認した。

(5) ALT へのインタビュー

もうひとつの新しい試みとして、数人の英語科の先生(2人のALTとひとりの社会科の先生を含む)への『英語でインタビュー』を企画した。前もって質問を準備させ、インタビューして得た情報を英語で自由にまとめさせた。ほとんどの生徒は、インタビューしながら単語や日本語でメモしておいたものを、後でそのままの会話形式にまとめた(資料3)。

しかし、この企画において、教師にとって満足できる成果は得られなかった。その原因として次の3点が考えられる。

- ・インタビューの対象がふたりのALTに集中してしまった。
- ・インタビュー可能な時間が英語の授業直後の休み時間に限られてしまい、時間的にせわしなかった。
- ・その結果、生徒は楽しんでいたが、得られた情報は細切れで3年生として十分な内容の深まりが得られなかった。

これらの問題点を解決するためには、ALTとのティームティーチングの時間をとって、インタビューの時間を確保するなど、教師の側の準備に工夫が必要であると思われる。あるいは生徒に企画させれば、もっと面白いアイデアが期待できそうである。次年度に機会を持ちたい。

〈資料2〉 “E.T.” のワークシート(1) (2) (3)

2001. 12. 14, 金

3- Name: _____

Title: E.T. (1)

Characters: E.T. Elliott
Michael R Gertie 妹
Mary 母 Harvey 父
keys 科学者

Words & Phrases: Oh kidding!
nothing, come back, Oh great, nice pizza
crazy, Hello, Oh my god!, You know talk
It is toy, Look! fish, You eat it, Are you hungry?
I am your only brother. What happen in here?
What is it? We are here, Where are you from?

Story: E.T.はETと出会い、母には
内緒で、兄弟3人でETを家にかくすことになる。
友達になり、ETと Elliott が同じことをして
しまう。→心が通じる。

感想: 何回か観た映画なので、英語でも
ある程度分かった。時々英語が聞こえてくる
けれど、

Comprehension (理解) ++ + + + +
Interests (興味) + + + + +

3- Name: _____

Date: / / 2002

Title: E.T. (2)

次の台詞は 誰が誰にどんな場面 で言っているか?

A. Run!! I want to save you!!
a (E.T.) b (カズ) c (理科の実験中)

B. You wanna call somebody?
a (カズ) b (E.T.) c (E.T. が電話の装置をもうあげた時)

C. He knows what he's doing.
a (E.T.) b (兄) c (E.T. が機械を操作している場面)

D. Be back one hour after sunset, no later.
a (兄) b (E.T.) c (夕日のできる場面)

Story: E.T. called to his home. But the accident happened.
E.T. ^{tell with} drop the river, and became sick. So Elliott, too.
Doctors come to their home. But E.T. died, and Elliott ^{reaction} ~~his~~
How did you feel about the movie?
E.T. and Elliott are very good friends. E.T.'s ^{death} ~~dead~~
made me sad.

Concentration (集中度) 5 4 3 2 1
Comprehension (理解度) 4 3 2 1
Interests (興味度) 4 3 2 1

3- Name: _____

Title: E.T. (3)

次の台詞は 誰が誰にどんな場面 で言っているか?

D. To the spaceship.
a (E.T. の妹) b (E.T. の父) c (E.T. の両親が Elliott をお連れする場面)

E. Follow me! ついて来い。
a (E.T.) b (男の子たち) c (バドカン・カウに閉じ込められている場面)

F. I just wanted to say... good bye.
a (E.T. の妹) b (E.T.) c (お別れの場面)

最後の別れの場面です。空想を膨らませて下さい。

E.T.: Come.
Elliott: (Stay.)
E.T.: Ouch.
Elliott: (Ouch.)
E.T.: I'll be right here.
Elliott: Bye.

英語を聞いてみよう!!
Story: E.T. alived again. E.T, Elliott and boys
went to forest. Elliott said, "good bye," to E.T.
E.T. went into the spaceship.

How did you think about the movie? (日本語でもいいです)
I thought Elliott really liked E.T. and E.T.
really liked Elliott, too. And I saw the movie,
I liked E.T. too.
Elliott と E.T. がお別れして抱きあうシーンがよかった。空も言葉
も同じではないのにあんなに心が通じた。感動したのは E.T. と
E.T. 。

〈資料3〉 インタビュー・シート

3- Name: _____

LET'S INTERVIEW TEACHERS

Prepare the questions for the interview:

1. Who do you want to ask questions? Mrs. Suzuki
2. What do you want to ask about? America
3. List of the questions:
① How many times ^{have} you ^{been} go to America?
② Please tell me your best memory of America.
③ Please tell me your favorite place in America.
④ Do you want to go to America again?
⑤ What do you think of America?

Now, let's go to see your teachers. Before asking them, make sure if they are free or not. After the interview don't forget to say "thank you!"

Good luck!

Answers:

1) 2回
2) 好きな思い出
好きな親戚で、な...心...好き...
3) New York, Chicago
4) Of course!!
5) アメリカは、心が広い!
小さいときは気にしない!!
1) I have been to America twice.
2) Everything is my best memory.
Everyone is so kind and they are
broad-minded.
3) New York and Chicago.
4) Of course! 5) Americans are broad-minded
and they don't mind trivial things

3 文字によるインプットとそれに続くアウトプット

(1) 主なインプット教材

Asahi Weekly, Asahi Evening News, Japan Timesなどを積極的に利用した。その他Marco Poloのような歴史上の人物やLena Mariaのような現在活躍している人物に関する簡単な読み物やインタビュー記事も取り上げた。また、Longmann出版の“True Stories in the News”という、世界で起きた出来事に関する新聞や雑誌の記事を英語学習者用に書き直した、ノンフィクションの読み物にもどんどん挑戦させた。

これらの中でも新聞記事は『今現在』のものとして生徒の興味を強く引くことができた。その他の読み物も、生徒たちに考えるきっかけを与えたり、英語圏の文化を知る手がかりとなったり、生徒たちの知的好奇心に訴えかけることのできるインプット教材であった。読んだ後、分かった情報について発表させたり、教師の質問に答える形で内容を確認させたり、記事についての感想や意見を述べさせるなど、インプットだけに終わらないよう、生徒からのアウトプットを促した。以下、授業実践をひとつずつ検証していく。

(2) 英字新聞

Asahi Weeklyからは難易度を示す星の数が2つ以下の記事やSnoopyの漫画を選んだ。中学生には★★が限度であると思われる(注：星の数が少ないほど難度は低い)。漫画を読んで生徒から笑いを引き出すことは難しいが、『父の日』や『バレンタインデー』など英語圏の人々の日常生活や感覚を知るのに役立った。

Asahi Evening NewsやJapan Timesのような一般向け英字新聞からは、生徒が興味を持てそうな記事を選ぶことが第一であるが、読ませ方にも工夫をした。一昨年のシドニー・オリンピックや昨年のニューヨーク・テロのように内容を熟知していても、長い英文記事を読みきくことは中学生にとってかなりの負担になると思われた。そこで、ひとつの記事を段落毎に分担したり、ペアを組んで協力しながら読み進めて、最終的にクラスとして記事全体を読破することをめざした。

シドニー・オリンピックの記事で初めてこの方法を試みた。サッカー、マラソン、水泳など、各自興味のある記事に取り組ませたのも良い結果を生む鍵だったのだろうが、順番に内容を発表し終わった時、実際には一部分しか読んでいないにも拘らず、生徒たちの表情には(読み終えた!)という大きな達成感、満足感が感じられた。

ニューヨークの事件では暗い内容が多かったため、新聞の見出しや書き始めの大活字の部分、写真の下の説明などに限定して読ませた。これらの部分は、単語のリストだけつけておけば中学生でも取り組めるレベルであり、読後の話し合いに十分な情報を提供してくれた。

英字新聞に対する生徒の取り組み姿勢は真剣で、後の感想には次のような意見が書かれていた。

- ・英語の新聞などを読んで意外に今の自分の知識で読むことができ、読んでいて楽しかった。

- ・新聞を読んで、アメリカの現状のつらさを知った。『今』起きている出来事だと改めて感じた。戦争はおきないでほしい。“Imagine”を思い出してほしい。(以上男子生徒)
- ・(Japan Timesの構成を見て)人々がわかりやすくよめるよう工夫されている。
- ・アメリカはこんな国かと発見した部分もあり、新聞からも色々なことが分った。
- ・(英字新聞を)読もうと思えば読めることがわかったので、受験がおわったら、読もう。

(以上女子生徒)

中学3年生の英語力でできることに限りはあるが、授業で英字新聞を覗いたことによって、生徒が世界に目を向け、世界の出来事を身近に感じ、将来英字新聞を読むきっかけを作れたなら、レギュラーコースの目標は大きく達成されたといえよう。

(3) 歴史に関する読み物

Marco PoloやGrimm Brothersのような歴史上の人物についての読みきりの教材を取り上げた。以前教科書でジョン万次郎を読んだ時はこちらから情報を与えてしまったが、今回は歴史的背景や事件について生徒に質問したり調べさせたりしたところ、英語は得意でなくても歴史に興味のある生徒が活躍の場を得て、授業にいつもと違った盛り上がりが見られた。英語を手段として用いて新たな情報を得、知識を深めることに生徒は興味を示し積極的に取り組んだ。中学3年一般生徒でもイメージ教育を行うことの可能性を感じた。その点からも、歴史に関する読み物はこれからも取り上げて行きたいノンフィクション教材のひとつである。

(4) 伝記・インタビュー記事

Lena Mariaの歌を聞かせた後写真集を見せた。新聞に載ったインタビュー記事と簡単な伝記も読ませた。伝記は中学生向けの平易な文章であったが量が多く、生徒の関心が薄らいだ感があった。しかし、レーナ・マリアの澄んだ歌声と写真集で見た姿とのギャップに生徒はひどく驚き、伝記や新聞記事で知った彼女の強い生き方に心を動かされ、人間の生き方を考えさせられたようだ。そのことが感想文によく表れていたのも、次にいくつか紹介したい。

- ・いままでの自分の障害者の見方をひっくり返してしまった。
- ・ハンディキャップを背負っている人が経済復帰できると思う。
- ・どれだけ多くの人に勇気を与えたか。(以上男子生徒)
- ・レーナさんの心のあり方がすばらしい……『人と私がちがうのではなく、やり方がちがう』……この言葉にとっても感動しました。
- ・テストの点数や成績より、自分のやりたいことをみつけ、とことんそれに打ちこむことの大切さを改めて感じました。
- ・自分を信じていて夢を実現して……がんばれば夢をかなえられるかもって思えた！
- ・英語で読むととても感動的。(以上女子生徒)

これらの生徒の言葉から読み取れるように、中学生が、英語を通してレーナ・マリアというひとりの重度身体障害者の生き方を知り、心で感じることができた。生徒は受験勉強を目

的として英文を読んだのではなく、情報を得る手段として英語を使った。「英語を通して」生徒は感動を味わうことができたのである。このことは教師にとっても大きな収穫であった。

(5) そのほかの文字によるインプット教材

簡単な読み物や“True Stories in the News”では、内容確認の際にできるだけ日本語を排除し、生徒が英語をそのまま理解するよう指導した。具体的には、読ませる前に写真を見せて内容を推測させたり、英語であらすじを述べさせたり、英語による True/False や Questions & Answers で内容確認させたり、ストーリーに沿って挿絵を並べ替えさせるなど、英語による内容理解をめざした。

レギュラーコースでは敢えて全文の日本語訳をしなかったが、ひとりの女子生徒を除いて全文訳を必要としなかった。彼女は英語の成績は良く、与えた程度の英文は十分理解できたはずであるが、本人は「分からなかった。基礎コースみたいに問題をやったほうがためになる」と感想文に記し、残念ながら最後まで心を開くことはなかった。これは教師とのコミュニケーションがうまく取れなかった例で、このような関係では英語のコミュニケーション能力の伸びは期待できない。

本コースでは日本語訳をしない代わりに音読をさせている。文字と音が結びついた時、いっそう印象強く生徒にインプットされ、授業のまとめとして有効だと考えるからである。

(6) アウトプットを促すための工夫

英語授業におけるアウトプットには「書く」と「発表する」ことのふたつが考えられるが、クラスの中の信頼関係が成立していて、教師と生徒、生徒同士が心を開いてコミュニケーションを図れる時、どちらの形にせよ自分の考えをアウトプットする事が可能となる。前述したように分割授業はその規模も構成員もこの条件を満たしているにも拘らず、実際には学年当初なかなか発言しなかった。夏休みに参観したオーストラリアの中学生と比較すると、彼らは初対面でも積極的に質問して自分をアピールしてくる点、日本人中学生とかなり異なる印象を受けた。

ソルトレーク冬季五輪における、日本選手陣の会見能力の低さが朝日新聞で取り上げられた。意見や抱負を公の場ではっきり言わない謙虚さは儒教思想に基づくそうだが、これからの国際社会ではそれでは「圧倒的に損」をするばかりでなく、誤解すら招きかねない。レギュラーコースの英語の授業では、このような英語母語話者との感覚の違いを理解させ、少しでもより「国際人」の感覚を持たせることを目指している。「心を開いて」自分の意見を伝えるよう励まししながら、どのような工夫を行ってアウトプットに対する生徒の心の壁を崩していったか、次に報告したい。

(7) 「発表」における工夫

発表することに対する生徒の抵抗を少なくするため、まず、ごく簡単なことから始めた。たとえば“Japanese Culture”を例にとると「じゃんけん」についてのサンプル英文を読ませ、抜けている接続詞を書き込ませながら、段落の構成を学ばせる。その後、本校の ALT に

『日本の文化を教えてあげよう』という具体的な設定で、生徒に日本の特徴的な文化をひとつ選ばせイラスト入りで説明文を書かせた（資料4）。その時、書く題材が決まった生徒にその題目だけ発表させた。これが発表の第一段階である。

第二段階として、生徒に書かせたものを教師が読んで聞かせた。例えば“Who am I?”というクイズでは、初めにサンプルの文を読んで“Mona Lisa”という答えを見つけさせた後、それを参考に各自オリジナルの人当てクイズを作らせた（資料5）。生徒自身に発表させようとしたが、恥ずかしがってうまくいかなかったため、教師がいくつかを選んで読み上げた。生徒の作品をまるまる発表したわけだが、教師が読む分には自分の作品が発表されることに対する「照れ」は見られなかった。また、聞く側の生徒の集中度は高く、読まれたクイズの答えを考えたり、ヒントの出し方に感心するなど積極的な反応を示した。

このように、クラスの中で生徒が書いたものを発表する機会をふやし、内容も段々に多くしていって、最終的に「英語新聞」の発表ができるように指導を続けていった。

(8) 「書く」ことにおける工夫

中学3年生にとって「書く」ことは難しいことであろうと思い、導入部分を大事にした。初めに生徒をやる気にさせられるかどうかは大きなポイントである。

まず、サンプルとなる文章を色々な形で先に生徒に提示することにした。日本語と英語の文章を対比させて空欄を補充させたり、書くテーマに沿った文章を速読教材として与えて基礎知識を持たせたりした。そして、実際に書く場面では、関連語句や熟語、参考になりそうな表現の例を示した（資料6）。修学旅行について書かせる前に他の教科書に載っていた“School Trip”の文を読ませたり（資料7）、体育祭について書かせる際には体育祭プログラムをALTに英訳してもらったりした。前の項(7)に述べたように“Japanese Culture”“Who am I?”も書かせる前に同じテーマの文章を読ませた。このような導入により、生徒の書くことへの抵抗感をかなり取り除けたのではないかと思う。

次に、書き始めの心構えを繰り返し指導した。通常の英語の授業では時間的に自由英作文に取り組むことは難しく、单元ごとの和文英訳や英作文の練習に留まることが多い。それもあってか当初、生徒は「自分の考え」を英語で書くことに抵抗を感じ、戸惑いを見せていた。

〈資料4〉 “Japanese Culture” のワークシート

Japanese Culture

*後の日本語に合うように()に適語を入れなさい。

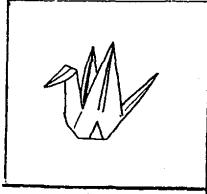
Jan-ken is the (1 easiest) game for choosing a winner and a loser, and it is the first game that (2 most) Japanese children learn. (3 Nothing) special is needed to play it. It takes (4 no) time at all. And you can see people playing Jan-ken all over Japan. (5 When) people in Western countries toss a coin, the Japanese play Jan-ken. (59 words)

ジャンケン（じゃんけん）は勝ち負けを決めるもっとも簡単なゲームです。ジャンケンは日本の子供達のほとんどが最初に学ぶ遊びです。ジャンケンには特別なものは何もありません。時間も全然かかりません。日本ではどこでもジャンケンをしている人を見かけます。西洋の人がコインを投げて決める場合に、日本人はジャンケンをします。

*さて、Mr. S. MacMahon に日本の文化を紹介しましょう。あなたなら、何を選びますか。30 words ぐらいを目安に書いてみましょう。

[Origami]

Origami is one of the beautiful cultures in Japan. We use a sheet of color paper and we are able to make a crane and so on. Japanese children enjoy making a lot of things.



OK

3- Name: _____

[crane]

〈資料5〉 “Who am I?” のワークシート

Rapid Reading 4
Who Am I ?

Who am I ? / A lot of people love me very much. / Some people say that I am one of the most beautiful women in the world. / How happy I am! / Many countries have wanted to invite me, but I don't like to visit foreign countries very much. / The United States and Japan are the only countries I have ever visited. / I visited Tokyo in 1974 and stayed there for about two months. / (72 words)

I am a picture of a woman. / I live in a very large building called the Louvre Museum in Paris. / I was painted by an Italian artist about 480 years ago. / I am always smiling. / A lot of people have tried to understand what my smile means. / They have said this and that, but no one has given a good answer. / Now do you know who I am ? / I am Mona Lisa. / Please come and see me. / I'll welcome you with my smile. / (83 words)

☆ True / false questions. Put (T) or (F) in each ().

(F) 1. I am a movie star.

(F) 2. I was born in United States.

(T) 3. I live in Paris.

(F) 4. I'm always laughing.

(T) 5. My 'father' is Leonard da Vinci!

☆ Who am I? Please write my name on the _____ in the story.
How do you think of me ? Do you like me ?

Yes, I do. _____

You seem beautiful. _____

3- k () _____

Let's create a funny question about a famous character.

3- () _____

WHO AM I ?

I am good at running.

I won the Olympic. I got a gold medal!

I like running. I like Mr. Koide.

He is a very great man.

Who am I ?

OK

The answer is Naoko Takahashi

〈資料6〉 “Sports Day” のワークシート

LET'S WRITE ! **Sports Day**

中学校最後の体育祭。あの日の感動を英字新聞にまとめよう。

☆ Useful Expressions:

体育大会	an athletic meeting, a sports day
開会式	an opening ceremony
応援団	a cheer group
～長	a leader of a cheer group
～旗	a banner
応援合戦	a dancing and cheering contest
団旗コンテスト	a banner contest
団対抗リレー	a relay race between colors
アルピニスト	a pole climbing competition
綱引き	a tug of war
大縄跳び	a big jumping rope tournament
32人33脚	a big three-legged race
タイヤ取り	a scramble for tires
ゲームに勝つ	win the game, defeat the enemy
～ 負ける	lose the game
勝者	a winning team, a winner
競技をする	have a game, take part in a game
団体で動く	work together, work in groups
力を合わせる	work together, cooperate
興奮する	get excited
優勝する	win a victory
～対～で	with the score of ~ to ~
閉会式	a closing ceremony

☆ Thinking & Talking Time

1. Did you enjoy your last sports day?

Yes, I did.

2. What did you work hard on?

A big three-legged race.

3. What was the most exciting game?

A big three-legged race.

4. What was your best memory?

A big three-legged race.

☆ Let's Try to Make Your Own Newspaper!

1 新聞の名称 (Memory Times.)

2 今日の日付 (July, 6, Friday)

3 小見出し(sub-title) (We won the three-legged race.

We worked together on a three-legged race.

At first, we couldn't run few meters, but we practiced hard for weeks, so we won the game. We were very glad to win the game!!

This is my best memory of the Sports Day!!

OK

3- () _____

★ 修学旅行の思い出(書き言葉). (目標: 70 words)

〈資料7〉 “School Trip” のワークシートの一部

LET'S WRITE **School Trip**

修学旅行の思い出をもとに英語の新聞を作ってみよう。

〈参考〉 (84)

Ex 1

① { 3-A TIMES } (新聞・名前)

② Thursday, July 3, 1997 (小見出し)

Terada Akiko

③ School Trip To Kyoto

④ We went to Kyoto on our school trip.

Ken, Yumiko, Hiroshi and Emi were in my group.

We had a very good time on the trip.


⑤ On the first day we went to Kinkakuji Temple. Kinkakuji was built by Ashikaga Yoshimitsu in 1397. ⑥ It looked bright in the sun. (49 words)

⑦ どこへ行きましたか? ⑧ 修学旅行はどこですか? ⑨ 感想・印象は?

さあ、いよいよ新聞を作ろう!

- 新聞の名前はなににするか。
- 日付を入れよう。
- 何を中心に書くか。 (Q & A - A × 8 を参考にしよう)
- sub-title (小見出し) を決めよう。--- 読者の興味をひくように
- 30 words を目標に2つ位の段落にまとめてみよう。
- イラストや写真もOK。準備しておこう。

Ex 2



① [JOYFUL PRESS]
② May 15, 2001
③ the Atomic Bomb Dome in Hiroshima

④ Last week we went on a school trip to Hiroshima.

⑤ We visited many places.

⑥ An old building was the most impressive. They call the building the Atomic Bomb Dome. (29 words)

⑦ We were taught forestry by Mr. Kaneko.

⑧ We went to Tanohara village.. We taught forestry there.

It was very excited and wonderful. Mr. Kaneko taught us things about forestry. He was very kind so he was loved by us.

Shitakes raised by Mr. Kaneko is very good!

OK

それは、初めに日本語で複雑な文を作りそれを逐語訳的に英語に直そうとしたためで、その結果、主語は見つからず、抽象的な英単語はわからず、四苦八苦していたのだ。しかし、初めから英語で考えるよう指導を重ね、主語・述語がはっきりしてくると、発想そのものが英語を頭においた形になった。そして、初めの頃より文は短くなったものの自然な英語で書かれるようになっていった。

第II章にレギュラーコースの問題点としてコース内の生徒の学力差が大きいと書いたが、それは「書く」ことにおいて最も顕著となる。そこで「読む」から「書く」段階に移るとき生徒が自分の能力に見合ったレベルの目標を設定できるようにした。力のある生徒は独創性のある文章を、自信のない生徒はサンプルに沿った文章を書けば良いとし、生徒に余計なプレッシャーをかけないよう留意した。

生徒が書いた文章は教師が目を通して、大きな文法間違いをチェックした後「OK サイン」をつけて返却した。そのサインで生徒は自分の文章に自信を持ったり、見なおして書き直したりした。書きっぱなしにせず、時間をおいてから自分の文章を読み直すことは、生徒が客観的に自分の文を眺めることを可能にし、さらに良い文章を書こうというモチベーションを高めることにつながったと思う。

このようにして、生徒たちは英語新聞の記事を書きためると同時に「自分の意見をまとめて英語で書く」行程に慣れていったのである。その成果は、学年途中で他のコースから移ってきた生徒を指導した時に、その生徒の取り組み方との違いから確認できた。生徒も自分の

英語表現力の伸びについて「振り返り」の中で次のように述べている。

- ・最初は、文章を書くとき『文法上まちがってないか』『変な文章じゃないか』と、少しビクビクしながら文を書いていたけれど、今は前よりは楽に書けるようになった。
- ・長文を自分で書くことで、少し、文法に自信を持てて良かった。
- ・初め面倒だった「書く」ことが次第に苦でなくなってきた。
- ・(自分の書いた文章を読み返すことで)どんな英文を作ってきたかを見て、反省することがたくさん！次回はもっとレベルをあげていきたいと思う。
- ・普段書けないような文が書けて勉強になる。
- ・書いてみるとけっこう書けた。
- ・(最初に頭の中で考えるとき) 日本語を工夫しなければならなかった。
- ・難しかったが問題集で英作するよりも楽しいし英文に興味がわいた。

これら生徒の言葉から、自信がつくことによって「書く」ことへの意識が大きく変わっていったことがわかる。受験問題をこなすだけが英語力をつける道ではないことに生徒自身が気づき、楽しみながら英語で考え、英語で書く力を生徒自ら会得していったのである。

4 総まとめとしての「英語新聞作り」

受信・発信できる英語能力の伸長をめざす授業のまとめとして、ここ数年「英語新聞作り」を授業に取り入れてきた。

初年度は、個人で書き上げるのは無理との判断からグループで一枚の壁新聞を完成させた。それを廊下に掲示して他のコースの人達や教師からも評価を得ることはできたが、この方法では一部の積極的な生徒、あるいは英語力のある生徒に記事を書く作業が集中し、残りの生徒はイラスト描きに終わってしまった。「もっと関わりたかった」という感想もあった。英語で記事を書いてみたくても言い出せない生徒が出てしまったのである。

そこで、翌年から発表の形を個人新聞に切り替えた。1学期から、生徒が書いた英文を添削した後、新聞記事として生徒個人別に教師が集めて保管しておき、それを2学期の終りに生徒に戻し、各自B4版の用紙を使って新聞の形にまとめさせた(資料8)。こちらから出した条件は、用紙を横長に使うことと日本語を書かないこと、の2点だけで、そのほかは生徒の自由にさせた。そうしたところ、初めのうち億劫がっていた生徒も英語で書くことを次第に楽しむようになり、最終的には新聞の形にまとめた達成感を味わうことができた。だが、出来上がった作品を各クラスの人数分コピーして冊子を作り読み合ったものの、教師には、生徒が他の生徒の作品をどれだけ読んでいるかが掴みきれなかった。生徒に読後感想を発表させる時間も十分には取れなかった。

そこで、3年目から発表の形を少し変えた。新聞を書き終わった時点で、各生徒にフィードバックシートを配り『工夫した点』『苦労した点』『お気に入りの記事』『反省・感想』を記入させ、そのことで自らの振り返りをさせた。次の時間には全作品を教室に貼り出し、ひととおり

〈資料 8〉 生徒の英語新聞の作品例 その(1)

3K TIMES^{3 ()}

We won the three-legged race


July 6, Friday

We worked together on a three-legged race. At first, we couldn't run few meters, but we practiced hard for weeks. So we were very glad to win the game!

This is my best memory of the Sports Day!

We were taught forestry by Mr. Kaneko.

We went to Tanohata village. We learned forestry there. It was very exciting and wonderful! Mr. Kaneko taught us many things about forestry. He was very kind so he was loved by us. Shiitake raised by him is very good.





Shiitake

WHO AM I ?

I am good at running.
I won the Olympic. I got a gold medal!
I like running. I love Mr. Koide.
He is a great man.
Who am I ?

ANSWER: Naoko Takahashi!

• ORIGAMI •

Origami is one of the beautiful culture in Japan. We use some sheets of color paper and and we are able to make a crane and so on. Japanese children enjoy making a lot of things.

LET'S INTERVIEW TEACHERS

☆ I ask Mr. Sakashita.

Q1. How many times have you been to America?
A1. I have been to America twice.

Q2. Please tell me your best memory of America.
A2. Everyone is kind and they are broad-minded.
Of course everything is my best memory!

Q3. Please tell me your favorite place in America.
A3. New York and Chicago.

Q4. Do you want to go to America again?
A4. Of course!

Q5. What do you think of America?
A5. Americans are broad-minded and they don't mind trivial things.

THE EDITORIAL POSTSCRIPT
It is difficult to write newspaper in English.
But I like writing now.
I had a good time in English classes.

THE END

11 / 30 (publication)

〈資料 8〉 生徒の英語新聞の作品例 その(2)


MOMOKO TIMES

School Trip

The Kenji Miyazawa memorial hall

We went to Iwate on our school trip. Our group went to Kenji Miyazawa memorial hall on the first day. We could listen to some fairy tales. I have learned many things about Kenji Miyazawa.

Who Am I ?



Who am I ?

I am a very famous mouse. Many people all over the world like me. I was made by Walt Disney. If you will come to Disney land and you can meet me.

Now do you know who I am ?

The Tanabata day

The Tanabata day is July 17th.

We write own dreams to a sheet of paper and hang it to bamboo.

Tanabata day has a story. If the day is sunny, Orihime and Hikoboshi can meet each other. And they can meet only the day in a year. So, people hope that Tanabata day is sunny.

見て回らせ、ひとり3点の作品を選ばせた。再度じっくり読み直してから、選んだ作品に対する短評を書かせ提出させた(資料9)。その後、ひとりずつ自分の新聞の前でフィードバックの内容を発表させ、最後に教師から、コースの仲間3人の短評と教師自身の評価を伝えた。上記の方法をとることを伝えた時には、自分の書いた英語新聞をみんなに読まれることに対して生徒は強い抵抗を示した。しかし実際に始めてみると、恥ずかしいという気持ちより仲間の作品を読み合う楽しさの方が勝ったようで、お互いの評価に対して関心を持って聞き合い、自分の番が来ると自らの作品をアピールしていた。

- やって良かった。
- やればできると思った。
- (新聞作りから) いろいろな文法を学べた。
- 苦労もおおかった。自分の思いを英文にあらわすことができると嬉しかった。
- 初めは英語で表現するところが難しかったけれど、だんだん長くかけるようになった。
- 現在完了などの文法が使えた時はすごく嬉しかった。
- 記事を何個かかいているうちに… (中略) …結構上手に構成できるようになりうれしかった。

- ・自分たちでもこんなにかんたんに充実した新聞が書けることに感動をおぼえた。
- ・大変だったけど出来上がってみたら満足感があつた。

これらの感想から、「英語新聞作り」を通して、生徒たちは英語で自分を表現することに確実に自信をつけ、楽しんでいることが伺える。生徒自身が自分の成長を実感している点も評価したい。生徒から概ねプラスの評価が得られたことを考えると、英語学習における生徒の動機付けという点において「英語新聞作り」が果たした役割は大きいと言えるだろう。

IV ま と め

少人数のレギュラーコースでは、生徒が「仲良くて良かった」と言えるような雰囲気の中で、歌や新聞など生活の中の「生きた」英語を受信し、また自分の考えを発信する機会を多く提供してきた。それにより生徒は画一的な受験英語から解放されると同時に、英語を通して世界の出来事を知り、お互いの考えを英語で伝え合うことを経験した。つまり、英語によって自分の外の世界と直接的・間接的にコミュニケーションする楽しさを味わったのである。その結果、生徒の抱く英語に対する「イメージ」が明るく楽しいものになったようだ。そのことは次のような生徒たちの感想の中に読み取れる。

- ・英語への興味・関心も深められた。
- ・英語を受験勉強として行うのではなく、英語の面白さを感じるために勉強しているという感じ
- ・普段できない英語の応用力がだいぶ固まった。
- ・人それぞれの表現方法がある（ことに気づいた）。
- ・自分の考えを英文で書く事ができたりすることにより英語が好きになってきた。
- ・生活の中でいろんな英語が使われていることにも興味を持ちました。
- ・ただ問題をとくだけのつまらない教科というイメージから“おもしろい教科”というイメージにかわりました。

ここには、英語の学習を押しつけられるのではなく、自ら積極的に学習に取り組んでいる生徒の姿が見られる。視点を変えれば、レギュラーコースの様々な取り組みは、英語学習における心理的側面に焦点をあて、生徒の英語学習に対するモチベーションを高めようとしたものであったと言えよう。教材の工夫、アウトプットにおける工夫、英語新聞作り、これらは全て生徒の英語に対する興味を喚起し、好奇心を満たし、自ら表現したいという気持ちを引き出すためのものであった。その結果、生徒自ら世界に視野を広げ、自信を持つことによって心を開き、英語で「伝え合う」喜びを感じた。このような生徒の一連の反応から、中学生にとって英語学習におけるモチベーションがいかに重要であるか確認できた。そしてその点において、レギュラーコースでは大きな成果を上げたと確信している。

V 今後の課題

一般授業と異なり、分割授業では成績がつかないため、生徒がのびのび学習することができる。このことは分割授業の大きな利点であるが、同時に、生徒の英語力の伸びを図る規準がない。生徒を指導する中で「フィードバックとモチベーションのバランス」について考えるとき、規準と比較したデータが必要になってくるであろう。中学生にとってどの程度のフィードバックは生徒の学習意欲を下げずに英語能力を高め、どの程度のエラーは見逃すことによって却って生徒に自信をつけるのか、効果的なフィードバックの方法を今後も検討していきたい。

さらに工夫を続けたいと考えているのは、英語の音声面におけるインプットソースの多様化である。歌だけでなくVOA (Voice of America: アメリカの外国人向けラジオ放送) のCDを聞かせたり、CNN ニュースのアメリカ大統領の演説をテレビで見せたり、名作といわれる映画のビデオを鑑賞させるなど、身近なところの生きた英語を、今後は文字だけでなく音声面でも積極的に取り入れていきたい。

しかし、レギュラーコースに欠けている最も大きな点は、英語母語話者との「会話」の場面である。授業の中で、聞く・読む・書く・発表することに自信をつけてきた生徒たちは、最終的に自分の英語で外国人と話を通じるかどうか試してみたいと考えている。「べらべら会話ができればカッコいいのに」という生徒の感想からもこれは明かである。大学附属という我が校の利点を活かせば、ALTだけでなく外国人留学生らと話す機会を設定することは可能であろう。しかも、単なるゲームや遊びの時間ではなく、英語による相互理解をめざすような企画であることが好ましい。なぜなら、英語を通して世界に目を向けた3年レギュラーコースの生徒達が求めているのは、英語母語話者との話し合いを通じて心の触れ合いを持つことであり、ひいては国際理解への糸口を得ることであると考えられるからだ。

中学3年生の「英語コミュニケーション能力」の伸長を図るためには、この点を実現させることが当面の大きな課題であろう。